



創立三十周年記念誌

英進館

自立した社会人の育成を目指す総合学習塾

創立三十周年記念誌

英進館



創立三十周年記念誌

英進館

自立した社会人の育成を目指す総合学習塾



館長
筒井 勝美



名誉会長
筒井 幸子

創立30周年 記念誌発行にあたって

此の度、無事創立30周年を迎えることが出来ました事、また、こうして30周年記念誌を発行できましたことは、何にも変えがたい喜びであります。

これは、ひとえに今までの永きに亘りご支援、ご交誼いただきました、塾業界や私立学校をはじめ、取引先や友人・知人など多くの方々のお陰であり、またご信頼戴いた生徒・保護者の温かいご支持と懸命に努力してくれた教職員の皆さんや家族、親類一族などの多岐に及ぶご協力の賜であります。

今や、英進館は生徒数も2万5千人を超え、合格実績や業績、規模において九州随一の学習塾として全国でも高い知名度の学習塾に成長しました。しかし、創立当時は、息子二人を含め、学年ばらばらの僅か16名の生徒で産声をあげた、ちっぽけな学習塾でした。

振り返って見ますと30年前、畑違いの私が妻幸子と共に苦難を覚悟で福岡市中央区の大名に創立したのが全ての始まりです。

それでも志は高く、知育、徳育、体育のバランスのとれた優秀児を育成するため、通常の学習指導に加え、スポーツクラブでの体づくりや禅寺での座禅合宿、勉強合宿、体験合宿、首都圏受験などを取り入れ、名称も九州英才学院(創立翌年名称を英進館に改称)と名づけました。

しかし、所詮合格実績もない始めたばかりの塾に、やり替えのきかない大切な子どもをかわせてくれる筈がありません。実績がない上、資金もなければ、ノウハウも、知名度も、信用もなく、全てが無いの尽くしての水面下からのスタートでした。

振り返って見ますと、創立以来、25年に及ぶ妻幸子との二人三脚で、幾星霜 喜怒哀楽を共にし、筆舌に尽くし難く辛いことのほうが多かった気がします。漸く、社会的信用や規模、業績の安定化など、将来への目処が立った創立25周年を機に長男俊英に経営を託し、現在に至っています。

英進館も今やそれなりの伝統と知名度が確立し、九州では大変影響力のある民間教育機関として、重要な社会的責任があります。

明文化こそしなかったものの、一貫して生徒の力をつけること、合格実績を上げること、塾の社会的信頼を高めることを最重点に、常に「本業」に徹してきました。

また、英進館は、資源も食糧もない日本の将来を左右する、未来永劫に亘っての重要な教育事業の一旦を担っています。子ども教育には、「一貫して変えてはならない事」と「時代と共に変えなければならない事」があると思います。

英進館が今後益々社会から信頼され、必要とされる学習塾として、また礼節を重んじ、人間性豊かで、優秀な人材を輩出し続ける教育機関として発展することを祈り、記念誌発行に際してのご挨拶と御礼と致します。

英進館の誕生と歴史

Since 1979

英進館の歩み - 30年早送り -

1 生徒十六名からの苦難のスタート

「ものづくり」から「人づくり」へ

英進館は九州松下電器第四事業部の工場長だった筒井勝美が、海外工場設立のための転勤(昭和53年6月にマレーシアの工場設立の社命を受けたが、家族の反対で辞退)を機に円満退職し、妻幸子と共に昭和54年1月から準備にかかり九州英才学院の名称で昭和54年4月に創立したものである。

次の仕事はやり換えがきかない。だからこそやりがいのある仕事を、胸をはって出来る仕事をした。考えに考え抜いて選んだのは、自分にしかできない特色ある塾づくりであった。九州松下電器産業(株)という素晴らしい会社で、16年間、世界を相手に新製品開発エンジニアとして培ってきた貴重な経験を、塾経営に活かすことができれば本望だと思っただ。また、運動会のかげつこでも順位をつけたい。ゴール手前で待つて皆一緒にゴールする。「勉強でいい発表をしても先生がほめるどころか無視する」など、子どもの能力を引き出す指導どころか、競争を否定し、努力を評価しない風潮や悪平等・画一主義が公教育現場にすでに蔓延し始めている実態を妻から聞かされていた。「子どもたちはいざれ実社会へ出て競争にさらされるのになんでそんなおかしな教育をするのだろう」という憤りから塾創設への決意が固まり、昭和54年1月に6ヶ月の引継ぎ期間を経て、九州松下電器を円満退職した。「物づくり」



狭い職員室の片隅で授業する筒井館長
(担当の算数・理科だけでなく、全教科教えることもあった)

から「人づくり」へ新たな挑戦が始まったのだが、それはまた苦難の道の始まりでもあった。当初の資金計画は1500万円、今の貨幣価値に置き換えれば6000万円位で(義弟から借りた1000万円と、自己資金500万円)住宅ローンを抱えたサラリーマンにとって当時(工場長での年収が約600万円)にしては莫大な投資であった。それでも、生徒が100名以上集まってくれば何とかローンと借入金返済、そして、妻幸子、俊英(小3)、克彦(小1)の4人家族の生活費は出るはずであった。

ところが蓋を開けてみると、何百万円もの広告費を使ったにも拘らず集まった生徒は、息子2人と知人紹介など含め小2から小6までの合計16名、予定の十分の一の惨憺たる状態であった。1ヵ月50万円の売り上げに対し出費は150万円、生活費どころかマンションのローンも借り入れ返済も、広告代も社員の給料も払えず、いつまでも手出しで賄えられる状況ではなかった。街中を歩きかう人を見る度に、他人は自力で生計を維持できているのに自分は妻も養えぬ無能者である現実、肩をすぼめ何時ビルの屋上から身を投げてもおかしなく窮地に追い込まれていた。

考えてみれば、サラリーマンから畑違いの学習塾を始め、どんな高尚な指導方針を掲げようと、実績や知名度はなく、生徒も人も金も信用もない未知数の学習塾に誰がやりかえのきかない大切な子どもを入塾させようか?

状況を察知した常勤講師たちが依願退職したため私が一年近く全教科を教え、一部補充のため学生アルバイトで凌いだ。

塾で教えるかたわら1000円でも2000円でも授業料を稼ぐため、知人の紹介で公民館で小学生1、2年生2名を教えに行ったり、保有していた大濠のマンションや室見の実家で近所の子3、4人を集めてもらい指導に行ったりした。夜は塾に戻り授業や補習をし、自作の教材や広告作りをしたり、子どもが寝静まった深夜は妻とチラシのポスティングや電柱の広告貼りで明け暮れた。それでも目に見える効果は少なく、最初の2年間は塾を閉鎖するか否か、閉める時期は?

保護者や生徒への説明は？、など悩みの連続であった。

そのとき、義母である堤君子が、苦勞してはじめたんだから石の上にも3年、迷わず続けなさいと励ましてくれた。まさにその通り、3年目に生徒数も100人を越え、ラ・サール中合格者が出た。創立以来初めての給料15万円を妻に手渡ししたら、もの凄く喜んでくれたのを今でも鮮明に覚えている。多くの人の助けがあつて漸く地獄から抜け出し、光明が見え始めた。

2 英進館の評判、知名度が徐々に定着

当初は、九州松下時代に経験した、国際競争の著しい輸出産業の新製品開発エンジニアとしての経験を基に、塾の教育方針を国際社会で立派に大成できる人材育成を目指した。確かな学力だけでなく、徳育、体育まで行う英才教育を目指し、創立した。塾名も九州英才学院と命名、勉強だけでなく、座禅や水泳、体操、体験合宿、勉強合宿も行った。また、一部の優秀児だけでは成り立たないため、小学生専門から中学生も対象にし、2年目の11月1日に名称を英進館に改め、大名の峯松ビルから薬院六ツ角の小さな第一高尾ビルに引越した。当時は机、椅子、エアコン等殆ど全て、中古品を購入した。

また、創立3年目頃から父親対象の保護者会も始めた。保護者会では自分の体験などを交え、受験勉強で培う努力の継続は、単に志望校合格だけでなく、将来実社会に出ても様々な点で共通点があり、一生役立つのだと説得、保護者からの強い信頼と期待が徐々に高まっていった。

当時、合格実績の高い福岡都市圏の有名塾は多数あり(森田修学館、福隆館、全教研、東京標準テスト、能開センター、学習受験社、時習館、後藤塾他)とても太刀打ちできる状況ではなかった。

ナーや学力低下問題と高齢化社会到来を見据えた子ども教育の在り方など頻りに講演会や新聞紙上での意見広告などを通じて、英進館の受験オンリーでない教育方針の社会への告知と塾業界全体のステイタス向上にも取り組んだ。また、全国に先駆けて理科実験授業、読書作文指導、体験合宿やホームルームの実施など人間教育にも取り組み、NHKで2度に亘り全国放送されるなど多くのテレビや新聞で報道記事として好感を持って取り上げられ、全国的にも知名度が高まった。

4 薬院本校一校集中から分枝展開への一大転換

首都圏の難関校をはじめ、附設中やラ・サール中の福岡市内からの合格実績はトップになったが、全体としては、まだ全教研や東京標準には及ばなかった。しかし、1教室からの合格実績と難や開成への合格実績などで圧倒的に他塾を凌駕し、中学受験なら英進館という評判ができた。

しかし大きな課題があつた。中学受験のためには保護者が遠方からでも送迎し通わせたが、有名県立高校志望者は都心部の英進館まで通って来ないため、修猷館や福岡高校などの実績が伸び悩んだ。

そこで、一校集中主義の方針を大転換、分枝展開に踏み切り創立9年目の昭和62年に香椎校、63年には荒江校、西新校の開校にこぎつけた。その年創立10周年記念祝賀会を西鉄グラウンドホテルで開催、教職員とその家族、取引先や世話になった多くの来客と喜びを分かち合った。その時の生徒数が約1600人で実に創立時の100倍、常勤教職員数が約50名の大所帯となつてきた。その後、必要に応じ堅実な教室展開をはかり、また夫々に様々な問題が立ち上がったが、ベクトルを描き全社員一丸となつた努力と運にも恵まれ、

が、全ての有名塾が福岡地区の有名県立高校が市内有名私立高、さらにはラ・サールや久留米附設への合格を目標においていた。それに対し、英進館の教育方針は全国レベルを目指し、首都圏や関西の有名校にも照準を置いた指導が話題になり熊本や佐賀、長崎など県外から通う教育熱心な塾生も出てきた。様々な工夫を凝らした手作りの授業や教材で、生徒一人ひとりに心を込めて指導を行つた。その代表的なものが生徒個人カルテで、生徒個々のテストの答案を複写して分析、保管し、答案は添削してすぐ生徒に返却した。コピーした個々の答案をもとに弱点分析や弱点補強に役立て、保護者個人面談に活用し好評となつた。

また、全国レベルの学力評価のため、首都圏の四谷大塚、TAP、関西の浜学園や芦研に何度も交渉に行き、九州で初めて首都圏や関西地域の超難関校受験に対処できる教材や合否判定テストの導入に成功し、的確な合否判定のもと自信をもつて開成中や桜蔭、灘や神戸女学院など、首都圏や関西圏の難関中学受験対策が確立し、受験引率を実施することができた。これらは今でも続いており、現在に至っている。

以上のような経過を経て、北部九州の優秀児が集まりだし、英進館の名が九州の中学受験界に轟き始めた。その頃から、新聞やテレビなどの取材が頻繁になり英進館のブランドが高まり、創立3年目で100名余りの塾生が、倍々で増加、創立5年目には塾生が400名を超えてテナントでは対応できなくなった。

3 創立6年目に、自社ビル教室第一号完成

5年目の昭和58年、初の自社ビル第一号の教室建設に着手、6年目の昭和59年7月に完成した。(新築ビル一期生の合格実績は素晴らしく、灘、開

順調に教室展開が出来た。この間創立以来、平成13年までの23年間、連続の生徒増を果した。それでも創立時の苦難を忘れず、自社ビル第一号以外は自己資金の範囲に設備投資を抑えた。利益が増加すると、金融機関から節税のため住宅の建設や土地購入を勧められたが、すべて借入金返済にまわし、バブルに引つかからず済んだ。その後、天神に進出するまでの15年近く、無借金堅実経営を貫いた。

5 平成五年以降、精鋭教師陣の活躍で、超難関私立中実績が急上昇

平成4年4月に東京大学を卒業した筒井俊英現社長が入社し、精鋭教師陣とともに超難関中学入試を対象とした算数のオリジナル教材の開発に熱心に取り組んだ。なぜ算数かといえば、超難関中学を受けるレベルの生徒は他の教科ではほとんど差がつかず、算数の出来が合格・不合格を分ける大きなポイントになっていたためである。開発したオリジナル教材は、教師の指導レベルもかなり高度な技術を必要としたので、中央区天神別館に特別選抜のトップゼミクラス(TZ)を設け、精鋭教師・教材・生徒が三位一体となつた強力な授業を推進した。精鋭教師陣の活躍はすばらしく、算数では平均偏差値が他の教科より5〜10抜き出た。

その後、オリジナル教材をスタートさせた効果は実績に如実に現れ、オリジナル教材を導入した翌年の平成5年以降、ラ・サール中学や久留米大附設中学という九州地区の最難関校をはじめ、灘、開成、麻布、愛光といった全国の超難関中学へも合格者を大幅に伸ばしていった。

そうして約2年の歳月をかけて、改良に改良を重ね遂に完成させた問題集・教材史上例のない算数オリジナルテキストは、平成7年1月に特許を出願し、平成10年11月、認可が下りた。

成、ラ・サールの合格実績の大幅な伸びに加え、久留米附設中合格者が前年3名から6倍の17名に増加、福岡市からの合格者数トップになった)建設に当たっては、土地購入とビル建設のため1億円という莫大な借金(年間売り上げ1億2000万円の頃)を妻の連帯保証人で行ったため、自己資金捻出のため、妻と自分の両家の親や兄弟からも合計3000万円借入し、清水の舞台から飛び降りるような決死の覚悟で、総建設費1億4000万円を調達した。

しかし、自社ビル建設は大成功で、あつという間に入りきれなくなり、また近くのテナント教室をいくつも借りた。8年目の昭和61年には、生徒数約1000名教職員数約40数名の急成長の優良学習塾として評判や知名度が高まった。翌年の昭和62年には、自社ビルに隣接した広い敷地の借用が運よく決まり、理科実験室完備の中学校舎が完成した。そのお蔭で、近隣に分散していたテナント教室への教職員の移動もなくなり、より集中した授業ができるようになった。また、小ホールも完備し、生徒激励会や小規模保護者会、教職員研修会が頻繁にできるようになった。

また、この頃、相前後して、県立高校のテレビ入試解答速報や有名私立学校長との新聞紙上対談(勝山灘校長、緒方久留米附設校長、井浦筑紫女学園校長、渋谷弘学館校長など)を恒例化した。また、新聞社とタイアップして



手前は昭和59年に完成した自社ビル第1号、奥はその3年後に完成の中学部校舎

6 創立25周年を期に、長男俊英に社長を継承。

特許取得以来、各方面、特に出版関係各社や算数教師より問い合わせが殺到した。分野別・解法別・難易度別のユニークな編集が注目を浴びている。

四谷大塚の教材で基礎から応用力までまんべんなく鍛え、超難関校へは特許教材で総仕上げをするという、英進館ならではの秘訣がここに誕生した。

創立15年目で約5000名、20年目で1万名に達し、平成16年には社長職を長男俊英に譲り、次男克彦も役員陣に加えた。平成4年に長男俊英が入社して以来、俊英現社長が中心となって算数の特許教材を開発したり、灘や開成、ラ・サール、久留米附設中の合格実績が一段と増え、全国から更なる注目を得られるようになった。また、学力低下問題や「ゆとり教育」批判など、日教組に迎合した文部省の教育施策等に早くから警鐘を鳴らし、文科省の「ゆとり教育抜本直直し」への大転換に大きな影響を与えた。今でも熱く教育提言をし続けている。そして30年目の現在、2万5000名の小・中学・高校生が通う西日本一の実績と規模の学習塾に発展、全国でも高い知名度の学習塾に発展し、私的機関として地域社会への更なる貢献が期待されている。

(平成21年12月)



天神3号館